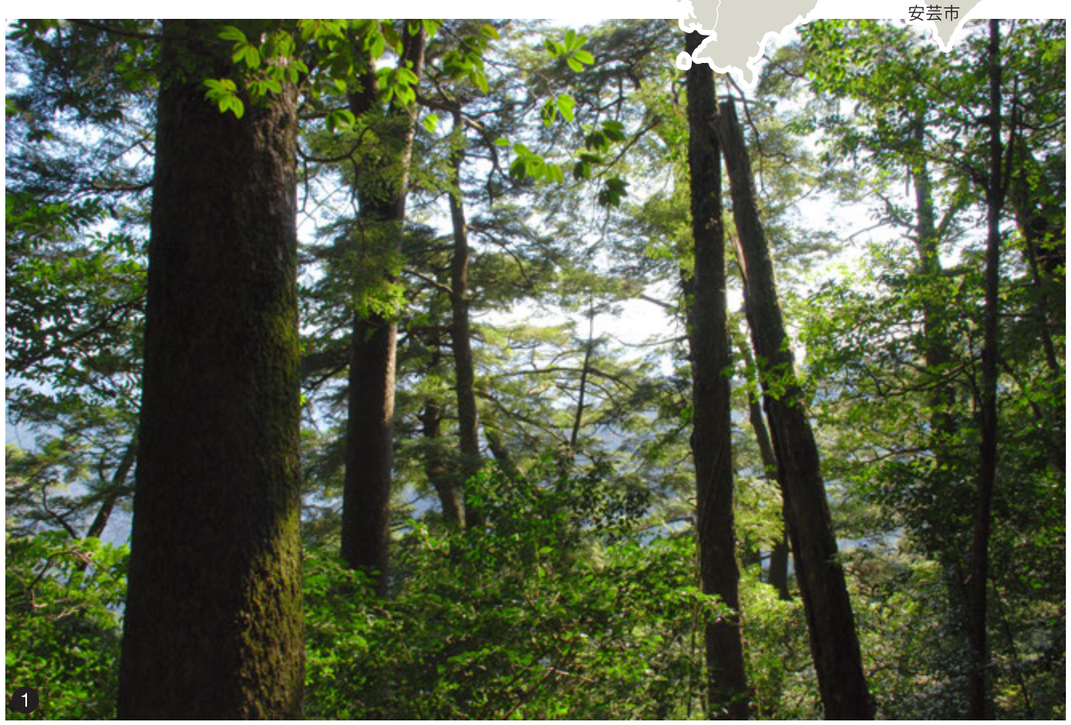
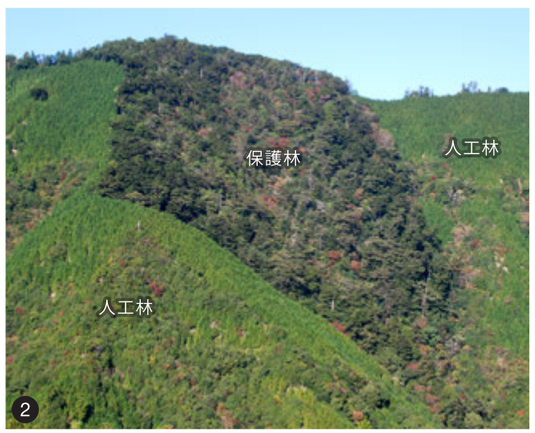
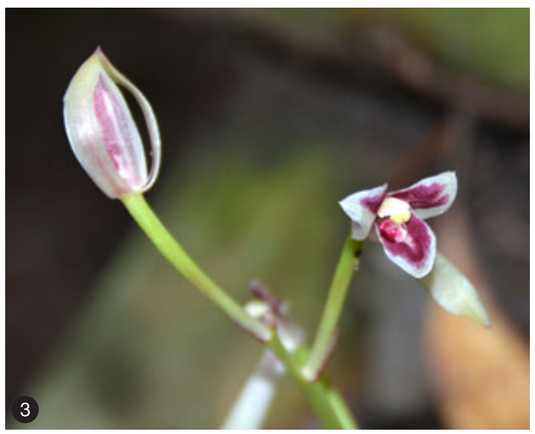
西ノ川山トガサワラ林木遺伝資源保存林

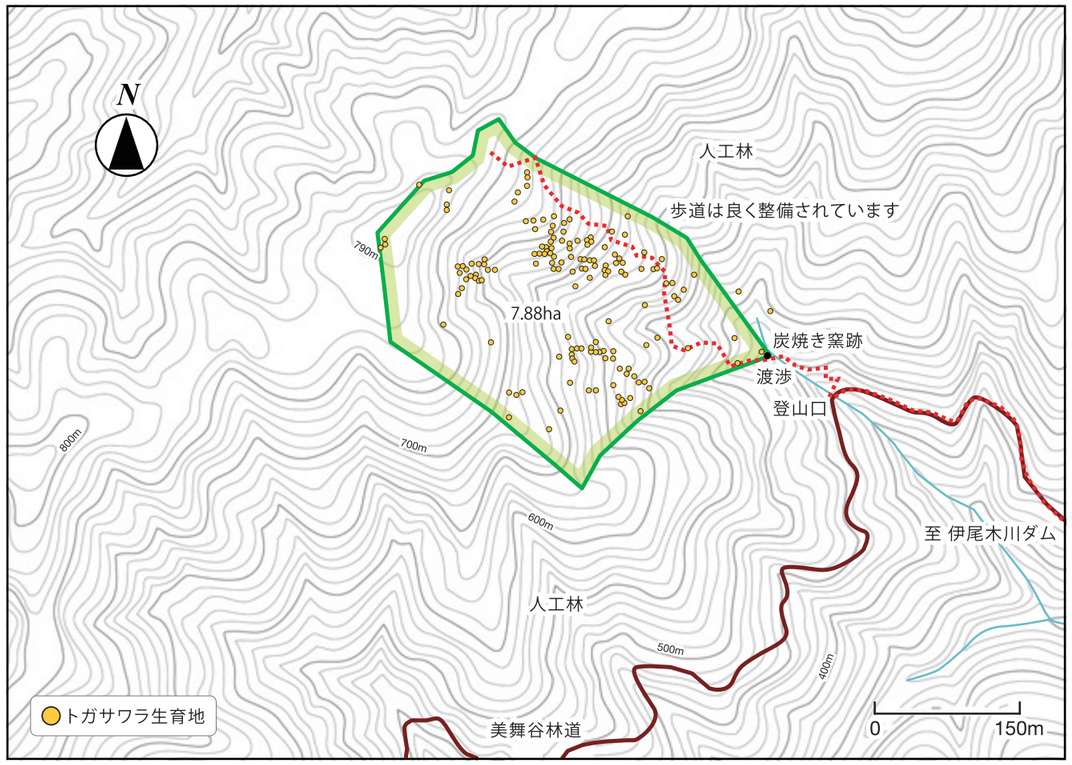
トガサワラはマツ科の樹木で、四国の魚梁瀬地方と紀伊半島の
大台ヶ原山系にのみ自生する極めて希少な樹種です。
暖温帯上部付近の尾根筋、特に急峻な斜面の
モミ・ツガ林に混生しています。

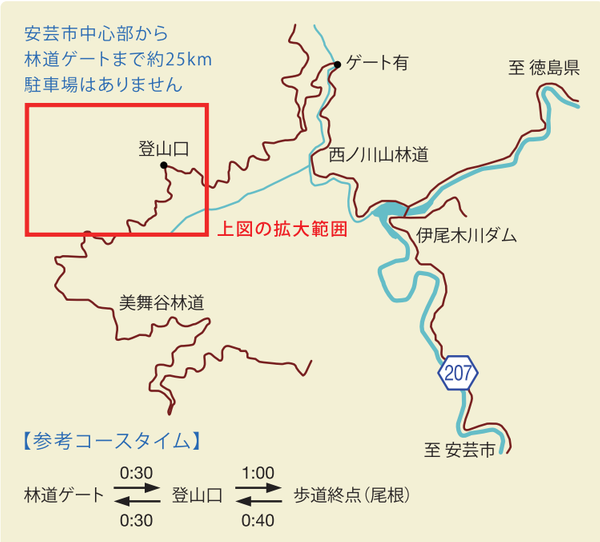






❶林内の様子。トガサワラは高さ40m程度の高木に成長する針葉樹で、見た目はツガに似て、材はサワラに似ていることからこの名前が付けられたといわれています。平成22年に行った調査では、保護林内でトガサワラ（胸高直径3cm以上）が168本確認され、樹高38mの巨木や胸高直径135cmの巨木が確認されています。 ❷保護林の全景。保護林制度ができた翌年の大正5年に指定されています。❸マヤラン(7月)。葉がなく、菌との共生により生活しているラン科植物です。





❹タマゴタケ。見た目は派手ですが、食用になるキノコです。地面から発生するキノコの多くが、トガサワラなどの樹木と共生する菌根菌です。保護林内では様々なキノコが生えるため、菌の種類も豊富であることが分かります。また、東京大学大学院准教授の奈良一秀氏によると、トガサワラのみに共生する菌根菌がいることも分かっています。 ❺チチタケ。傷ができると白い乳液が出るためこの名前が付けられました。こちらも食用キノコです。